

研究企画委員会プロジェクトB 活動報告

子どもの「参加」を支えることばの力とは何か

—あらためて「学習言語」を問い直す—

内田千春（東洋大学）・小川珠子（中国帰国者支援・交流センター）
河野あかね（つくばインターナショナルスクール）立山愛（別府大学）
櫻井千穂（大阪大学）・齋藤ひろみ（東京学芸大学）
高橋美奈子（琉球大学）・浜田麻里（京都教育大学）

研究企画委員会プロジェクトBでは、これまで「ことばと参加」をテーマに読書会を実施してきた。本報告では、その中で得られた学びを元に、子どもの日本語教育の教育実践を分析する。会場では「子どもが学習の場に参加するときに必要な「ことばの力」について、どのように考えるか？」について議論したい。

1. ヴィゴツキー『言語と思考』を読んで私たちが話してきたこと（小川珠子）

学習の場への参加を支えるのに、教科学習で用いられる用語や表現を覚えるだけでは十分ではない。しばしばカミンズの BICS と CALP が引用されるが、元は会話的側面と学問的側面を区別する必要から提案されたもの（Cummins, 2000）で、拡大解釈がされている。

ヴィゴツキーの『思考と言語』からヒントとして得られた3つの考え方を紹介する。

3.1 語の獲得ではなく概念の形成

ヴィゴツキーは「生活的概念」と「科学的概念」という二つの概念を区別した。子どもは最初、日常生活を送る中で自然発生的に生活的概念を獲得するが、その後、学校教育の中で体系的な「科学的概念」と出会い、それを身に付ける。ただ、最初に生活的概念がないと科学的概念を獲得することはできず、また科学的概念を知っても、生活的概念によって具体性が補われないと、単なることばだけの理解になってしまう。両者を往復することで、それぞれが発達する。

3.2 社会的相互作用による発達へ

ヴィゴツキーは「共同の中、指導の下では、助けがあれば、子どもはつねに自分一人でするときより多くの問題を、困難な問題を解くことができる」と言っている。周囲の助けがあればできる領域は「発達の最近接領域（ZPD）」と呼ばれる。子どもの発達は、教師からの教え込みではなく、教師を含む他者からの働きかけや他者との相互作用によって促される。

3.2 言語による対話～思考のための内言の発達

ヴィゴツキーはことばについて、コミュニケーションの機能を持つ「外言」と思考に関わる「内言」の関係に注目している。ことばの最初の機能は外言であるが、外言による他者との相互作用の中で得た気付きを自分の中に取り込み、さらに自分との対話を繰り返し、思考を深めていく。その時に必要なのが内言である。内言と外言を行き来する過程が「言語的思考」である。私たちが育てなければならない「思考のためのことばの力」は内言と外言の往復の過程で発達していくのである。

2. 子どもの「参加」を支えることばの力を育む—小学校の実践事例（立山愛）

公立小学校1年生在籍の児童を対象とした実践を紹介する。年長時に来日、滞日歴1年8ヶ月で、両親とも中国語話者である。

2.1 【事例1】放課後指導における語彙の学習

この事例では、児童が日常生活で使ったことのない日本語の語彙を、母語による思考を交えながら獲得していく。授業担当教員の声掛けが二つの言語がその境界線を超越して思考を媒介するトランスランゲージング (Garcia & Li 2014) に重要な役割を果たしている。

2.2 【事例2】国語科「むかしばなしをよもう」

「おおきなかぶ」の学習時に児童が「『おおきなかぶ』、中国の教科書にもあるよ。」と言ったので、児童が在籍学級で中国語の「おおきなかぶ」の読み聞かせをすることになった。発表後に大きな拍手が起こり、中国語話者である児童とともに学べることへの肯定的な発言が聞かれた。

児童が学級の一員として自己実現し、学級というコミュニティに「相互承認」が生まれた。一方が参加のために学習するのではなく、共に学習の意味を創出しコミュニティとして変容した。

3. 子どもの「参加」を支えることばの力を育む—中学校の実践事例（河野あかね）

インターナショナル・スクールにおける実践を報告する。当該校では国際バカロレアに認定されており、探究型、概念理解型の学習を行っている。校内では日本語科目以外は英語が使用されている。報告では10年生を対象とした森鷗外「高瀬舟」を使用した単元の実践を取り上げる。

授業では、生徒主体で協働的に内容理解を進め、「知足」「安楽死」等の現代社会に通じる問題について自らの意見を持つことを目指した。

授業の成果は以下のようにまとめられる。

- (1) 文中のできごと・人物と身の回りのニュースや家族などを比較することで生活的概念と科学的概念の往来が生じた。
- (2) 全員が参加、協働した双方向の学びによって発達の最近接領域 (ZPD) における他者との相互作用があった。
- (3) 個人の活動と、ペア、グループ、クラスでの活動の組合せで内言と外言の往来があった。

当該校における協働活動では、周囲との相互作用を通してことばで考える力、考えてことばにする力が養われているが、それに加え、各自の日本語力に関わらず自信や達成感、参加できた喜びが感じられている。また同時に、互いの言語文化背景の承認、尊重による参加が促されている。ことばを使うことで参加が達成され、参加することでことばの学習が実現している。

【引用文献】

Cummins, Jim. (2000) *Language, Power and Pedagogy: Bilingual Children in the Crossfire*. (Bilingual Education & Bilingualism Book 23). Multilingual Matters. Kindle 版.

García, O., & Li, W. (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. Palgrave Macmillan.

ヴィゴツキー、レフ・セミョノヴィチ (2001) 『思考と言語 新訳版』新読書社

表 単元の流れ

0. トピックに関連する記事と意見文[個人]
1. 作者[個人、クラス]
2. 原文の範読と初発の感想[個人、クラス]
3. リライト版による内容理解[個人、クラス]
4. 辞書作り[個人、ペア、クラス]
5. 辞書を使いながら内容理解[グループ]
6. ワークシートによる内容理解[個人、クラス]
7. 内容理解の中間課題[個人、グループ]
8. 他の作品との比較[個人、ペア、クラス]
9. まとめ[個人、クラス]
10. 最終課題[個人]